

世界宗教者平和会議

會議宣言

1970

10月21日日本・京都

世界宗教者平和会議は、緊急な問題である平和について討議するために、主要な諸宗教の指導者を一堂に集めるという試みとして、歴史的な意義を持つものである。我々は、重大な時に会合している。今まさに、我々は、残酷で非人間的な戦争や人種的・社会的・経済的暴力に直面している。地球上の人類は、核戦争による絶滅の脅威にさらされている。このような絶望的状况は、人類にとって未曾有のものである。我々は、世界の諸宗教が、平和実現のために真に重要な役割を果たしうることを確信して、世界各地から京都に集まった。我々は、バハイ教、仏教、儒教、キリスト教、ヒンズー教、ジャイナ教、イスラム教、神道、シーク教、ゾロアスター教、およびその他の諸宗教の教徒として、平和に寄せる共通の関心のゆえに相和して集まったのである。

我々は、緊急を要する平和問題を前にして、会合を重ねるにつれて、我々を分裂させるものよりも、結合させるものの方が、より重要であることを見出した。我々は、次の諸点で一致した。すなわち、

人間家族としての人類の根本的一致と平等、および尊厳についての確信において、はたまた、

個人とその良心の尊さを知り、

人間社会の価値を認識することにおいて、そしてまた、

力は正義でなく、人間の力は自足的、絶対的でないとさとり、

愛、同情、無私、内面性の真実と霊の力は、究極的のところ憎悪、敵意、利己心にうちかつと信ずることにおいて、また、

富める者や抑圧者に対し、貧者、非抑圧者の側に立つべきだと信ずることにおいて、そしてまた、

善が遂には支配するという深い望みにおいて

これらの信念を共有するがゆえに、すべての宗教者は男女を問わず、平和と平和達成のために心を致し、平和のしもべとして、全身全霊をもって働く特別の責務を与えられていると、我々は信ずる。我々は、しばしば、われらの宗教的理想と平和への責任にともなうてきたことを、宗教者として謙虚にそして懺悔の思いをもって告白する。平和の大義に背いてきたのは宗教ではなく、宗教者である。宗教に対するこの背反は、改めることができるし、また改められなければならない。

二十世紀後半における平和への急迫した挑戦に直面して、我々は、非武装、開発、人権の諸問題を熟考せざるを得ない。いぜんとして速度を早める軍備拡大競争、国内及び国家間の貧富の差の拡大、世界各地における悲劇的な人権侵害などにより、平和が危殆に瀕していることは明白である。非武装問題を検討し、我々は、平和が武器の蓄積によって達成されるものでないことを確信するに至った。故に我々は、通常兵器、核兵器、化学生物兵器を問わず一切の破壊的武器を含めた全面的非武装への処置がただちにとられることを訴える。我々は、こうした兵器の研究、製造、蓄積のために、途方もなく膨大な人類の資源が消費され、その結果、開発問題が一層悪化していることを知った。これらの資源は、戦争、その他の社会的暴力のもとをなす諸々の不正と戦うためにはむしろ今すぐにも必要とされるものなのである。四人に一人の割合で子供が死ぬ社会は、戦争状態と同じである。開発だけで、平和が達成されるものではないとしても、開発なしには、恒久的平和はあり得ない。故に我々は、全人類のために七十年代を開発の十年とする国連の方針を支持することを約す。

現在、世界各地に見られる社会的動揺は、人権を擁護し、確認し、促進することと平和との間に存する関連を如実に物語っている。人種差別、民族的宗教的少数者に対する抑圧、政治犯その他の囚人に対する拷問、政治的自由や機会均等に対する法律上事実上の否認、婦人に対する平等な権利の拒否、植民地主義の種々な抑圧形体等々、これら一切の人権侵害は、人類の文化をおとしめる暴力のエスカレーションを招く。

平和への深い関心を持って各宗教からのこの会議に参加した我々は、自らのためだけでなく、貧しき者、

被擄取者、難民、さらに家を失い、戦争により生命、田畑、自由を蹂躪された人たちなど、力なくその声もかえりみられることのない大多数の人間家族に代わって語ろうとするものである。われわれは、各宗教、その連合機関、宗教協力による種々の平和運動に対して、さらに、自国をはじめとする諸国家、国連、そして、既成宗教以外で、人類福祉に関心をもつすべての人々に向かって呼びかけるものである。

我々は、自らをも含めて一切の人々に対し、およそ教育、文化、科学、社会、宗教等の分野における真剣な努力は、その出発点において、まず人類と、人類のすべての営みが、今や一つの運命に結びつけられているという厳粛な事実の認識に立つべきだと言いたい。我々は、生きるのも死ぬのも一緒である。我々は、共通の破滅へと漂い行くこともできれば、平和のための戦いに共同して当たることもできる。一人一人の生活の中で平和を徹底させ、平和のために犠牲を払う覚悟がない限り、戦争とその原因を真に告発することはできない。我々は、戦争に対し、また軍事的勝利による平和の達成という幻想に対して、断固たる反対の態度をとるように全力を尽くして世論をみちびき、人々の良心を覚醒しなければならない。宗教は今や、歴史的背景の相違を乗り越えて、真の平和達成しようとする努力に向かって万人を結束させるべきだと信ずる。我々は、歴史的諸宗教の外にある人でも、平和への願いを同じくするのであれば、教派的限界を乗り越えて協力する義務があると信ずる。

軍事力の完成と維持への努力は破滅への道であることを、我々は、その所属する国々に警告することを誓う。そうした努力は恐怖と不信を醸成し、保険・住宅・福祉・に必要な資源を費やし、人類の生存を脅かす軍拡競争を激化させる。それはまた、各国間の対立を強めて軍事的経済的ブロックの形成をもたらし、平和を単なる武装休戦または、恐怖のバランスとしてしまう。それは、全人類の福祉に対する真に普遍的な関心を、単なる幻想へと追いやってしまう。これらすべてに対して、我々は断固として「否」を言うのである。

我々は、国連に対して、この平和への熱意を伝えたいと思う。平和の達成と維持のためには、国連の存在を認めるだけでなく、その決議が実行されるよ

うに支持することが大切である。我々は、国連に対し、あらゆる国を加盟させるように、また議事の進め方において、より公平に権限と責任が割り当てられるように要望する。我々は、国連加盟国が、現実の紛争問題、または紛争が予測される問題に関して、国連の決定に従うように強く要望するものである。

我々は、真実の恒久平和を樹立すべく、宗教者としての責任に目覚め、かつその責任を担いうるよう
に、この会議に対して切に望むものである。

Religions for Peace 